

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：32305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02889

研究課題名(和文)日本人英語学習者の談話標識の使用・習得に関する研究及び教材開発への応用

研究課題名(英文) A Study of Japanese EFL Learners' Use and Acquisition of Discourse Markers:  
Towards a Better Development of Teaching Materials

研究代表者

嶋田 和成 (Shimada, Kazunari)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：30642277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人英語学習者の談話標識の使用・習得に関して、母語である日本語の影響、英語教科書の影響、教室における明示的・暗示的指導の影響の3点に関して調査・分析した。その結果、それぞれの要因が多少なりとも学習者の談話標識の使用・習得に影響を及ぼすことが明らかとなり、影響を受ける談話標識の項目を特定できた。また、談話標識の教科書への掲載の仕方とその指導方法を再検討する必要があることを確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

非英語母語話者特有の談話標識の使用・習得に影響を与える要因を調べた研究は、国内外でこれまでほとんどなかった。その意味で、本研究は母語、教科書、指導という3つの要因から調査を実施しており、今後の教材開発や教室での指導に貢献できる。また、本研究の枠組みを用いることで、談話標識以外の語彙・文法項目についても、非英語母語話者の使用・習得に影響を与える要因を探ることが可能であり、その点も大きな意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：The present study investigated the use of discourse markers in Japanese EFL learners' speech and explored the effects of their first language, the presentation of the lexical items in textbooks, and classroom instruction on their acquisition of discourse markers. The results of the quantitative and qualitative analyses indicated that the three factors may have an impact on learners' choice of discourse markers in their speech. Additionally, the study suggested that materials designers and instructors should reconsider how discourse markers should be provided in language courses.

研究分野：英語教育学，言語学

キーワード：外国語教育 英語教科書分析 コーパス言語学 談話標識 話し言葉

## 1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの研究においては、主に英語母語話者の産出言語について、*and, but, because, well, you know* などの談話標識 (discourse markers) の使用の調査・分析が行われ、その結果をもとに、談話標識を例文に多く盛り込んだり、文法項目同様、多くの解説を掲載する英語教科書も出版されている (e.g., McCarthy, McCarten, & Sandiford, 2006)。これは、英語熟達度が高くない非英語母語話者にとっても、談話標識は限られた英語力でなんとか相手にメッセージを伝えるための重要な言語項目となっている (e.g., House, 2013) からであるが、非英語母語話者の談話標識の習得と使用に関する研究は、まだ数が少ない。

(2) 非英語母語話者の談話標識の使用傾向に関する研究に関しては、コーパス言語学の手法を用いて、英語母語話者の話し言葉や書き言葉における談話標識の種類や頻度と比較したものがある (e.g., Fung & Carter, 2007; Romero-Trillo, 2002)。また、日本人英語学習者の話し言葉における談話標識の使用傾向の特徴を分析した Miura (2011), Shimada (2011, 2014) などがある。これらは、いずれも非英語母語話者が英語母語話者に比べて、特定の談話標識を過剰、過少使用していることを明らかにしたものである。

(3) 非英語母語話者の談話標識の習得の特徴をつかむためには、非英語母語話者特有の談話標識の使用に影響を与える要因を調べる必要があるが、この点に関しては、これまでほとんど研究されていない。数少ない先行研究としては、日本の中学校・高等学校の英語教科書と大学・短大用の英語教科書における談話標識の使用について調査を行い、教科書で使用されている談話標識がどの程度、学習者の話し言葉に反映されているかを計量的に分析した Shimada (2012, 2013)、教室での指導の影響を調査した三浦・嶋田 (2014) があるが、これらの研究では、談話標識の使用頻度を中心に分析したため、教科書で提示された談話標識の機能を学習者がきちんと理解して、発話の中で適切に使用しているのかという点は明らかになっていない。

## 2. 研究の目的

上記の通り、英語の話し言葉における非英語母語話者の談話標識の使用傾向が、英語母語話者と違うことがわかっている。そこで本研究では、どのような要因がどの程度、日本人英語学習者の談話標識の使用と習得に影響を与えているのかを解明し、今後の教材開発に寄与する基礎資料を作成することを目的とする。

そのために、母語である日本語の影響に関する調査、学習者の主たるインプット資源となる英語教科書・教師の指導の影響に関する調査、今後の英語教科書に掲載する談話標識の種類と提示の方法、順序をまとめた資料作成を行う。

## 3. 研究の方法

本研究は、主に次の3つの調査・分析で構成されている。

### (1) 日本語と英語の発話データに含まれる談話標識の対照分析

この調査では、日本語の談話標識の使用が英語の談話標識にどのような影響を与えているのかを調べるために、日本人英語学習者約60名の日本語と英語の発話データを採取した。発話データの採取にあたっては、日本人大学生を対象とした英語授業の中で、インタビュータスク、イラスト描写タスク、テーマに基づくショート・スピーチタスクを日本語と英語で実施した。インタビュータスクでは、3問の質問に答えるQ&A、イラスト描写タスクでは、英検2級の第2次試験問題で使用された3コマイラストの描写、そして、ショート・スピーチタスクでは、与えられたテーマで1分間話すタスクを用い、いずれのタスクもCALL教室を使って、PCの画面によるタスク提示、ヘッドセットによる発話録音を行った。

録音後、採取された発話データは、文字データとしてスクリプト化し、電子ファイルとして整理した。このスクリプト化された日本語と英語の発話データに含まれている談話標識の種類、頻度をインタビュータスク、イラスト描写タスク、テーマに基づくショート・スピーチタスクの3つのタスクごとに量的に分析した後、談話標識の使用場面と機能を質的に分析し、日本語の影響を観察した。

### (2) 中学校・高等学校の英語教科書と学習者の発話データに含まれる談話標識の比較分析

この調査では、英語教科書を通したインプットが日本人英語学習者の発話にどのようにアウトプットされるのかを談話標識の観点から分析し、英語教科書の影響を調べた。まず、採択率の上位より、中学校の英語教科書を3種類・3学年分の計9冊、高等学校の英語教科書から3種類・3学年分の計9冊を選び、教科書データベースを作成した。

次に、この教科書データベースに含まれる談話標識を抽出し、学年別に使用頻度を量的に分析した後、モノログ、ダイアログ別に談話標識の使われ方を量的・質的に分析した。加えて、その分析結果を日本人英語学習者コーパスに含まれる談話標識の頻度と比較した。

### (3) 教師による談話標識の明示的・暗示的指導の効果の検証

三浦・嶋田(2014)の実験手法に基づき、日本人大学生 58 名を対象に談話標識の明示的・暗示的指導が学習者の発話内容にどの程度影響するのかを調査・分析した。本実験では、大学のオンライン授業におけるスピーキング指導の一環で、主な談話標識 15 項目を明示的、暗示的の 2 通りで指導した。

手順としては、オンラインの CASEC SPEAKING のテスト形式を援用し、2 つの異なるタスクを事前テストとして参加者に実施した後、教員が明示的に談話標識の種類、使い方などを説明する方法(明示的指導)と、モデルアンサーを PC 画面上で与え、談話標識のところを下線などで強調して、学習者の気づきを促す方法(暗示的指導)の 2 種類を行った。また、指導後には、学習者の発話に対するフィードバックも行い、最後に事前テストと同じタスクで事後テストを行った。

学習者の発話データはオンラインツールを使って録音・採取された。採取したデータは、スクリーンショット化され、明示的指導を受けた参加者グループと暗示的指導を受けた参加者グループに分けた上で、談話標識の頻度分析、質的分析を行い、2 つの指導方法の効果を検証した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

日本語と英語の発話データに含まれる談話標識の対照分析の結果、インタビュータスク、イラスト描写タスク、テーマに基づくショート・スピーチタスクの 3 つのタスクのいずれにおいても、日本語の談話標識の使用が英語の談話標識の中で、複数の機能を有している *and, so, but* の使用に影響を与えていることが示唆された。

次に、教科書データベースの分析の結果、*and, because, or* といった構造的、指示的機能をもつ談話標識がモノログで多く使用され、*I think, I see, OK/okay* などの対人関係的な機能の談話標識がダイアログで多く使用されていることが確認できた。加えて、その分析結果を日本人英語学習者コーパスに含まれる談話標識の頻度と比較したところ、モノログ、ダイアログのどちらも日本人英語学習者の談話標識の使用が限定的なものであり、一部の談話標識においては、教科書でのインプットが学習者の言語には十分には反映されていないことが示唆された。

また、教師による談話標識の明示的・暗示的指導の効果については、学習者の発話データに含まれる談話標識の使用頻度が事前・事後テストで有意差がみられるかどうかを明示的・暗示的指導の 2 つのグループごとに対数尤度比検定にて検証をした。その結果、指導の効果は限定的であったが、明示的に指導した場合に、日本人学習者の使用頻度が低い *well* のような項目を発話する場面が見られた。

以上より、日本人英語学習者特有の談話標識の使用・習得において、本研究の結果からは、母語である日本語の影響が顕著にみられたが、英語教科書と教師の指導の影響については、限定的なものであった。従って、今後の教材開発においては、日本人英語学習者の談話標識の使用・習得の特徴を踏まえ、談話標識の掲載の仕方を再検討する必要性があり、教室においては、教科書に掲載された談話標識を明示的に指導していく必要があることを確認できた。

### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

研究開始当初の背景でも述べたように、非英語母語話者特有の談話標識の使用状況を調査した研究はいくつかあったが、その影響を与える要因を調べた研究は、国内外でこれまでほとんどなかった。その意味で、本研究は母語、教科書、指導という 3 つの要因から調査を実施しており、この分野における独創性の高い研究として位置付けることができる。

また、本研究の枠組みを用いることで、談話標識以外の語彙・文法項目についても、非英語母語話者の使用・習得に影響を与える要因を探ることが可能であり、その点もインパクトが大きいと考える。

### (3) 今後の展望

教科書によるインプットの影響を正確に検証するには、その教科書を使用した学習者の産出データを分析する必要があるが、本研究では諸般の事情により、中学生・高校生の発話データを入手できず、代替として学習者コーパスとの比較を行った。可能であれば、中学生・高校生の発話データを入手し、再度、教科書によるインプットの影響を分析したい。

また、本研究では、母語、教科書、指導という 3 つの要因からなる調査を実施したが、その結果を踏まえて、今後の英語教科書に掲載する談話標識の種類と提示の方法、順序が十分に検討できていない。各調査の分析結果を精査しながら、教育的示唆につながる基礎資料の作成を今後継続して行う予定である。

### < 引用文献 >

Fung, L., & Carter, R. (2007). Discourse markers and spoken English: Native and learner use in pedagogic settings. *Applied Linguistics*, 28, 410–439.

House, J. (2013). Developing pragmatic competence in English as a lingua franca: Using discourse markers to express (inter)subjectivity and connectivity. *Journal of Pragmatics*,

- McCarthy, M., McCarten, J., & Sandiford, H. (2006). *Touchstone 3* (Student's book). New York, NY: Cambridge University Press.
- Miura, A. (2011, September). *Discourse markers in spoken corpora of Japanese EFL learners*. Paper presented at Learner Corpus Research 2011, Louvain-la-Neuve, Belgium.
- 三浦愛香・嶋田和成. (2014). 「明示的または暗示的指導の効果が日本人英語学習者の談話標識の使用に及ぼす違い」. 『外国語教育メディア学会関東支部第 133 回研究大会発表要項』, 34–35.
- Romero-Trillo, J. (2002). The pragmatic fossilization of discourse markers in non-native speakers of English. *Journal of Pragmatics*, 34, 769–784.
- Shimada, K. (2011). Discourse marker use in learners and native speakers: A corpus-based analysis of spoken English. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, 22, 377–392.
- Shimada, K. (2012). Discourse markers in EFL textbooks and spoken corpora: Materials design and authenticity. *Language Education & Technology*, 49, 215–244.
- Shimada, K. (2013). A comparative analysis of discourse markers in Japanese EFL textbooks and learner corpus data. *Language Education & Technology*, 50, 69–91.
- Shimada, K. (2014). Contrastive interlanguage analysis of discourse markers used by nonnative and native English speakers. *JALT Journal*, 36, 47–67.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Shimada Kazunari
2. 発表標題 The Effects of Explicit and Implicit Instruction on the Use of Discourse Markers in Japanese EFL learners' Speech
3. 学会等名 International Association of Applied Linguistics (AILA) World Congress 2021 in Groningen (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shimada Kazunari
2. 発表標題 A Cross-linguistic Analysis of Discourse Marker Use in Speech
3. 学会等名 International Association of Applied Linguistics (AILA) World Congress 2017 in Rio (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------